

～これなに？こうすると、どうなるの？～

手触りの良い軽量粘土を指で押ししたり、ちぎったりして見せて、指示やお約束はなく「これで遊ぼう」と、子ども達に渡しました。最初はきよんとしていますが、ちぎる、伸ばす、手の平で握る、など、粘土に関わり始めます。

小さな廃材を出すと、行為の幅が広がりました。ストローを刺す、跡をつける、キャップに詰める、スプーンですくうなど、それぞれの興味ある事に集中していきます。紙筒に石を入れて出してを繰り返しながら、何かを考えています。廃材の木片に興味がある子は、それを積み重ねていきます。絵の具を出すと、黒い板に塗り、画面を見つめています。粘土や廃材にも塗ります。粘土を絵の具に入れている子もいます。次から次にやりたい事を見つけ、60分以上遊び続けていました。

これはやらない、という制限はなく、大人の声掛けも少ない。選択肢がある中で、自分の興味ある物に手を伸ばし、やりたい事を見つけ、自分の世界に没頭してしまいました。

手元を見つめる眼差しは真剣です。考えている表情です。子ども達は“知りたい”なのでしょう。これがナニモノで、どうなるのか。初めての物、起きる事と出会い、確かめながらインプットしていく。そうやって世界を知っていくのでしょう。それは探求の種です。

“これをやる”と答えが決まっていると、“それは違う”が生まれます。“これでどう遊ぶ？”と見守ってみると、“そうやりたいのね”と、その子の世界を知る事ができます。

素材を変化させ続け、最後には不思議な物体が残っています。知りたい事を探求しながら遊び続けた、その子の表現の痕跡です。

